例　　言

1．本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内東部遺跡群発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は、国（1,700,000円）、県（850,000円）の補助金を受け、平成元年6月22日から平成2年3月31日まで実施した。

3．調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林　茂吉
社会教育課長	吉田　和子
町史・文化財係長	多田　威
町史・文化財係	坪田　幹男・桜井　信枝・高崎　直成
発掘調査担当者	坪田　幹男・高崎　直成

4．本書の執筆は調査担当者が下記のように分担した。

Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ章：坪田、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ章：高崎。

遺構図版作成は小林登喜枝、土器・石器実測図版作成は高崎があたり、土器拓影図作成には整理作業参加者全員の協力を得た。また本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5．各遺跡の調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏、機関よりご指導、ご協力を賜った。

荒井幹夫、今井堯、内田賢司、神木繁嘉、小出輝雄、駒井和久、笹森健一、塚田政子、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、和田晋治、　（敬称略）

埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合。

6．発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。銘記して、謝意を表したい。

（発掘調査参加者）敬称略

新井唯二、飯塚泰子、石川与一、井坪志津子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曽根キク子、太田明代、奥村友子、遠田つる、笠原英子、金子君子、木村美和子、小林こずい、佐久間ひろ子、佐藤あい子、佐藤至一、佐藤みえ子、塩田佐代子、柴田しづ子、鈴木英子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、田村福次郎、豊島礼子、中嶋末子、中島優子、並木宗次、西山しめ子、野岡由紀子、比嘉洋子、細谷清作、松木美恵子、山内栄美子、山下一枝、弓和子、若林紀美代

（整理作業参加者）敬称略

石垣ゆき子、須藤さち子、杣木嘉図子、高橋けい子、中田藤子、中野和子

凡　　例

1．本書の図版の縮尺は、住居・土坑$\frac{1}{60}$、炉$\frac{1}{30}$、土器実測図$\frac{1}{4}$、土器拓影図$\frac{1}{3}$とした。

2．遺構図中の細数字は床面もしくは確認面からの深さ（cm）を示す。

3．胎土粒子に関する各項の規準は次のように定めた。

小礫：2.0mm以上、　粗砂：0.2～2mm、　細砂：0.2mm以下。

4．土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表わしている。

Ⅰ．経　　緯

○　調査に至る経緯

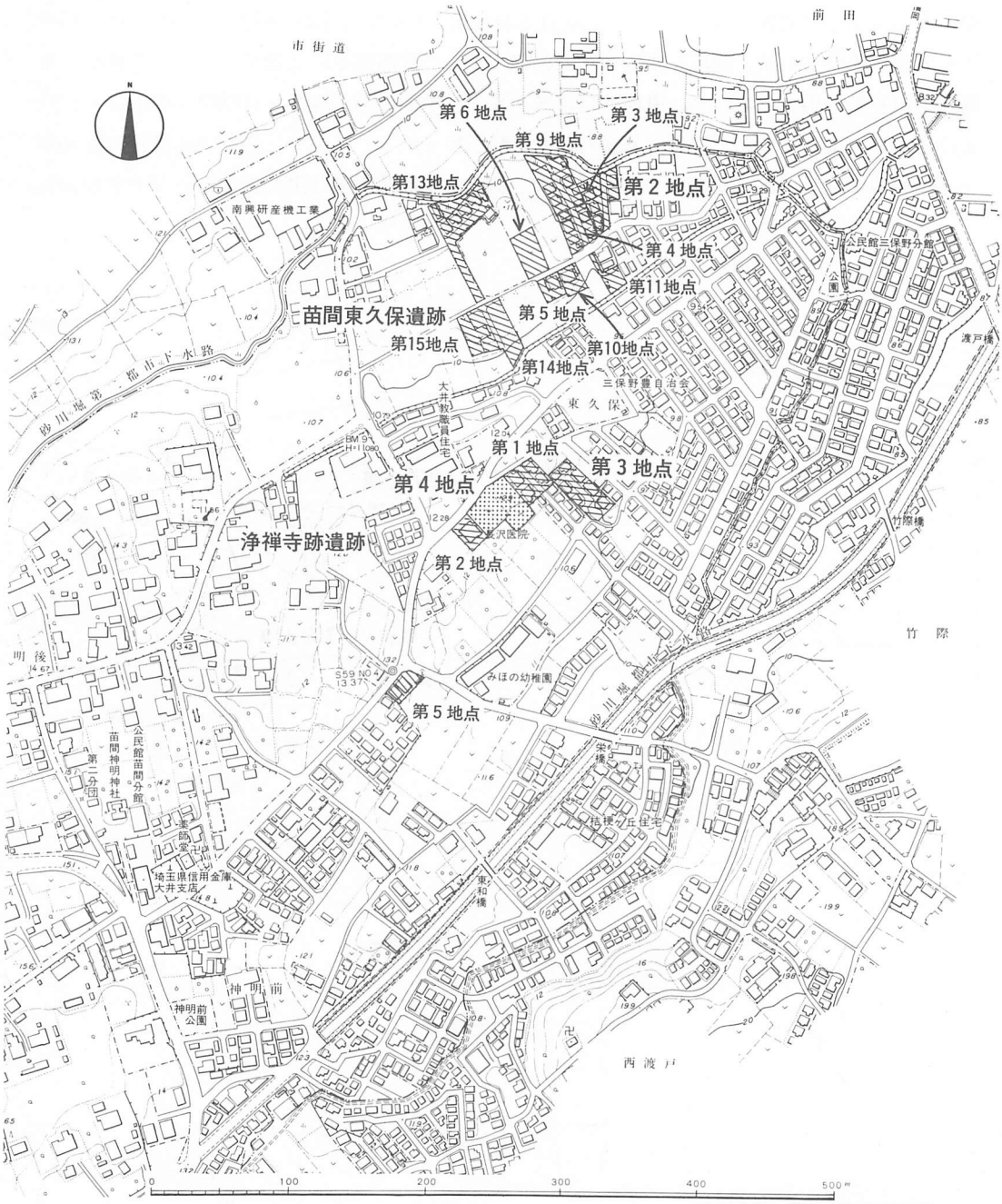
埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積８kmで現在の人口は38,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80％近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、1978年以来国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整して行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成元年度の調査は、下記の11箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

No	遺跡・地点名	所在地	調査面積	調査期間
1	大井戸上遺跡試掘調査（第２地点）	大井町大字大井字東台231･232	974㎡	６．22～７．20
2	西ノ原遺跡第38地点	〃　苗間字西ノ原142-2	74㎡	８．29～９．12
3	西ノ原遺跡第39地点	〃　〃　142-2	94㎡	８．29～９．12
4	亀居遺跡第17地点	〃　亀久保字亀居995-3	112㎡	９．14～９．18
5	本村遺跡試掘調査（第８地点）	〃　大井字東原134	200㎡	９．11～９．13
6	東台遺跡試掘調査（第15地点）	〃　大井字市沢577-1	600㎡	10．17～11．10
7	浄禅寺跡遺跡試掘調査（第４地点）	〃　苗間字神明後346-1	150㎡	11．15～11．25
8	本村遺跡試掘調査（第９地点）	〃　大井字東原138	200㎡	12．４
9	本村遺跡第10地点	〃　〃　172-1	500㎡	２．21～２．28
10	本村遺跡試掘調査（第11地点）	〃　〃　82-3	370㎡	２．７～２．22
11	亀居遺跡第19地点	〃　亀久保字亀居1,007	613㎡	３．12～３．26

上記の調査のうちNo.２～４、９、11は個人住宅の建設に伴う事前の記録保存の調査であった。１は会社寮建設、５は土地区画整理事業に伴う小学校グランド移設予定地の試掘調査。６は資材置場予定地、８は町のゲートボールコート予定地、10は大井・苗間第一土地区画整理事業に伴う範囲確認調査であった。このうち１、５、６については試掘調査の後、本調査に移った。７は当面の開発がないため検出遺構のみ調査した。８は遺構を確認したが、基礎工事の掘り込みが浅く地下の遺構に影響を与えないとの判断から盛土により遺構を保存をした。

また本報告書には、以上の11箇所の調査に加え、西ノ原遺跡第40地点、亀居遺跡第18地点の調査報告を、遺跡の構成をさらに総合的にとらえるために参考資料として掲載した。

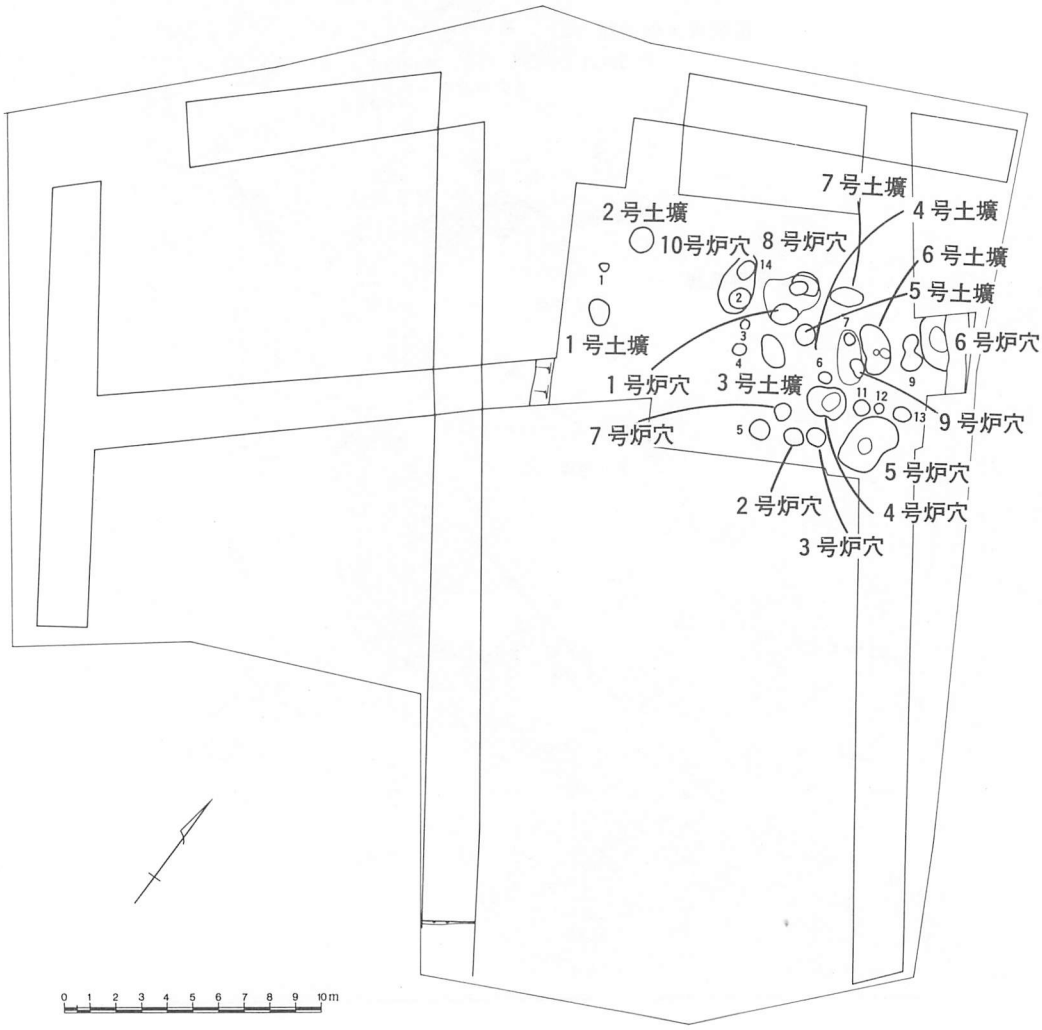
Ⅱ．浄禅寺跡遺跡第４地点



第２図　浄禅寺跡遺跡の地形と調査区（$\frac{1}{5000}$）

１．遺跡の立地と環境

浄禅寺跡遺跡は、これまで苗間東久保遺跡の一部としていたが、さかい川に面した苗間東久保遺跡と、旧浄禅寺付近に湧水源をもち東北に流れてさかい川に合流する浄禅寺川南縁に立地する浄禅寺跡遺跡と２つに区分することにした。浄禅寺跡遺跡は、浄禅寺川水源近くの標高12～14ｍの台地に立地する遺跡でこれまで３地点で調査が実施されている。今回の調査区の東側に隣接する第１地点の調査では、炉穴10と土坑14基が検出されており、出土遺物のほとんどは早期後半～末葉の条痕文土器、繊維束圧痕文・羽状縄文をもつ前期前半の土器であり、前期後半の諸磯式土器若干も出土している。遺構外包含層からは、中期中葉・後半・後期前半の土器も、以上のほかに出土している。三角凹基式石鏃や打製石斧も出土している。浄禅寺跡遺跡の東縁部では住居は未検出であるが炉穴・土坑が顕著である。本遺跡西半は未発掘であるが中期が多い。



第３図　浄禅寺跡遺跡第４地点　遺構配置図（$\frac{1}{300}$）

2．調査の概要

第４地点は第１地点の西側に隣接する。１９８９年11月15日より調査を開始した。調査区は北から南へ緩やかに傾斜しており、斜面に対して平行・直交する２ｍ幅のトレンチを計６本設定後、人力により表土はぎを行なった。遺構精査の結果、南側斜面地での遺構検出はなく、西半分では耕作による撹乱が深いうえ出土遺物も稀なため面的調査を省略した。調査区東北部も耕作による撹乱が深かったが、焼土等遺構が確認されたため、面的調査を行なった。炉穴10・土坑７・ピット14を検出し、11月25日に測量・写真撮影等を実施し調査を終了した。

3．炉穴

調査区の北東部、緩斜面のはじまる台地縁辺部に集中して10基の炉穴が検出された。西側の第１地点の炉穴群に連なる。遺構の多くは炉部近くまで耕作による削平を受けており、炉穴の形状・規模・新旧関係等、正確に確認できない遺構が多い。

1号炉穴

表土を20cmほど除去した面で焼土の散る撹乱土(畝)を確認した。撹乱層を除去した時点で２ヶ所の焼土範囲を検出、それぞれ１号・８号炉穴とした。１号炉穴と８号炉穴の間に畝が走るため、新旧関係は不明である。残存する１号炉穴南側の形状は最大幅108cmの弧状を描き、遺構確認面から炉底までの深さは20cm、弯曲して立ち上る。炉部は北側が削平されているが、径40cm・焼土厚７cmを測る。覆土はしまりのある褐色土で、焼土・炭化粒含有。時期は出土土器から縄文早期末である。

2号炉穴

表土を除去した時点で焼土範囲を確認したが、炉部直上まで削平を受け、覆土も５cm前後で平面形態、３号炉穴との新旧関係は確認できなかった。また東西方向に走る畝のため南北両側が削平されており、炉部の平面形態も不明である。炉部の最大幅50cm・焼土厚８cm。炉面は浅鉢状に窪む。

3号炉穴

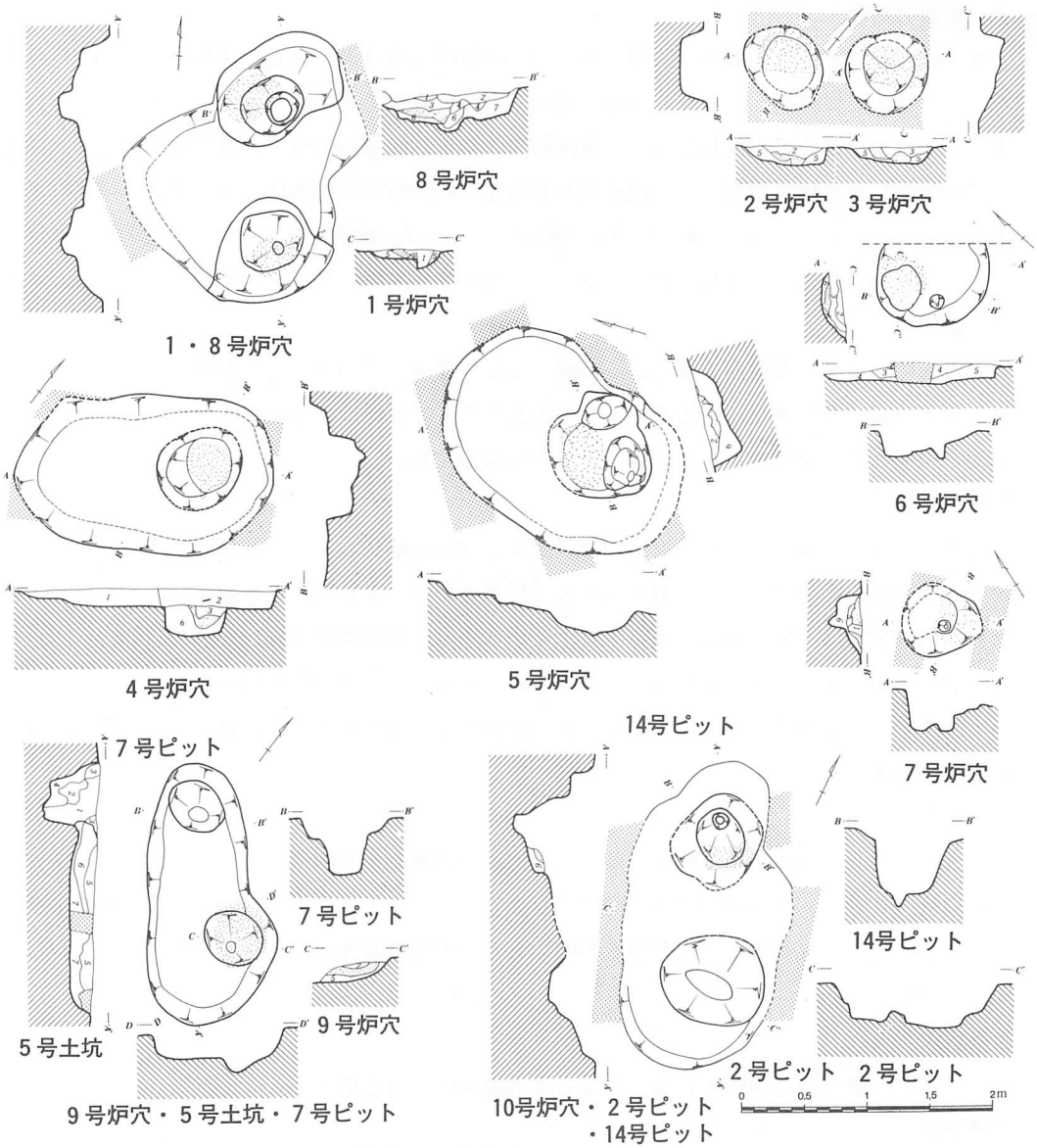
２号炉穴同様形状は不明である。炉部の最大幅50cm・焼土厚８cm。

4号炉穴

平面楕円形を呈す。底面は東寄りに位置する炉部へ向けて緩やかに傾斜していき、東側で直線的に立ち上る。長径206cm・短径126cm・遺構確認面からの深さ14cmを測る。炉部両端も削平されるが径35cmの円形を呈すと思われる。焼土厚５cm。時期は覆土中土器より早期末。

5号炉穴

南側斜面へ向けての最縁辺部に位置する。遺構南側は畝により削平され不明であるが、北側では楕円形を呈する。底面は南側の炉部へ向け緩やかに傾斜する。推定長径２ｍ以上・短径140cm・遺構確認面から炉底までの深さ30cmを測る。覆土はやや軟質の暗褐色土で焼土・ローム粒を含む。炉部は南北両端を畝で削平されるが、最大幅50cm・焼土厚６cmを測り、凹凸が激しい。



第４図　浄禅寺跡遺跡第４地点　炉穴（$\frac{1}{60}$）

土層説明

1　暗褐色土　しまり弱。焼土粒子・ローム粒子少量。

2　暗褐色土　しまり有。焼土粒子・炭化粒子多量。

3　暗赤褐色土　しまり有。焼土を極多量に含有。

4　褐色土　　しまり有。焼土粒子少量含有。

5　褐色土　　硬くしまる。焼土粒子・ローム粒子含有。

6　黄褐色土　熱によるローム硬化土。

7　ローム層　ピット等の壁部分。

6号炉穴

東側を根切溝に、炉穴中央を東西方向のトレンチャーで削平される。平面形態は南北方向に長い楕円形を呈すと思われ、長径92cm・遺構確認面から炉底までの深さ20cm。底面より皿状に緩やかに立ち上る。炉部は炉穴北寄りに位置し、40×35cmの楕円形を呈す。焼土厚8cm。炉部は非常によく焼け締っている。炉部南側に径10cm・炉底からの深さ10cmの小穴がある。

7号炉穴

2号・3号炉穴同様形状は不明である。炉部は浅鉢形となり、最大幅40cm・焼土厚8cmを測る。炉部へ小穴が掘り込まれる。

8号炉穴

1号炉穴同様削平のため平面形態は不明であるが、撹乱土を除去した面の形態は楕円形を呈し、炉部は西寄りに位置する。長径110cm・遺構確認面から炉底までの深さ28cmを測る。炉部は最大幅44cm・焼土厚11cmを測り硬く焼ける。炉穴下に径24cmの小穴がある。

9号炉穴

5号土坑の底部近く、炉部まで削平された状態で検出した。炉部は楕円形を呈し浅く窪む。炉部の長径50cm・短径40cm・焼土厚6cmを測る。

10号炉穴

撹乱土を除去した面で、炉部を検出した。南側は畝により、北側は14号小穴により切られ、形状等は不明である。遺構確認面からの深さ34cmを測る。炉部は30cmほど残存する。焼土厚6cm。硬く焼ける。

4．土坑・ピット

1号土坑

不整形で長軸98cm・短軸80cm・深さ34cm。底面は凹凸が激しい。覆土はしまりある暗褐色土で、焼土を少量含む。時期は底部近くから出土の土器から中期前半。

2号土坑

ほぼ円形を呈す。長軸92cm・短軸84cm・深さ22cm。底面は平担である。覆土は軟質の暗褐色土で、ローム粒子・焼土を少量含む。時期は出土土器から前期後半。

3号土坑

不整長円形で、長軸134cm・短軸80cm・深さ13cm。覆土は軟質の褐色土で、焼土・炭化粒を少量含む。

4号土坑

ほぼ円形を呈す。長軸83cm・短軸72cm・深さ38cm。すり鉢形で覆土は3号土坑と同じ。

5号土坑

長円形を呈すが北側は7号ピットに切られる。推定長径210cm・短径80cm・深さ23cm。9号炉穴を壊して構築されている。底面よりゆるやかに立ち上る。

６号土坑

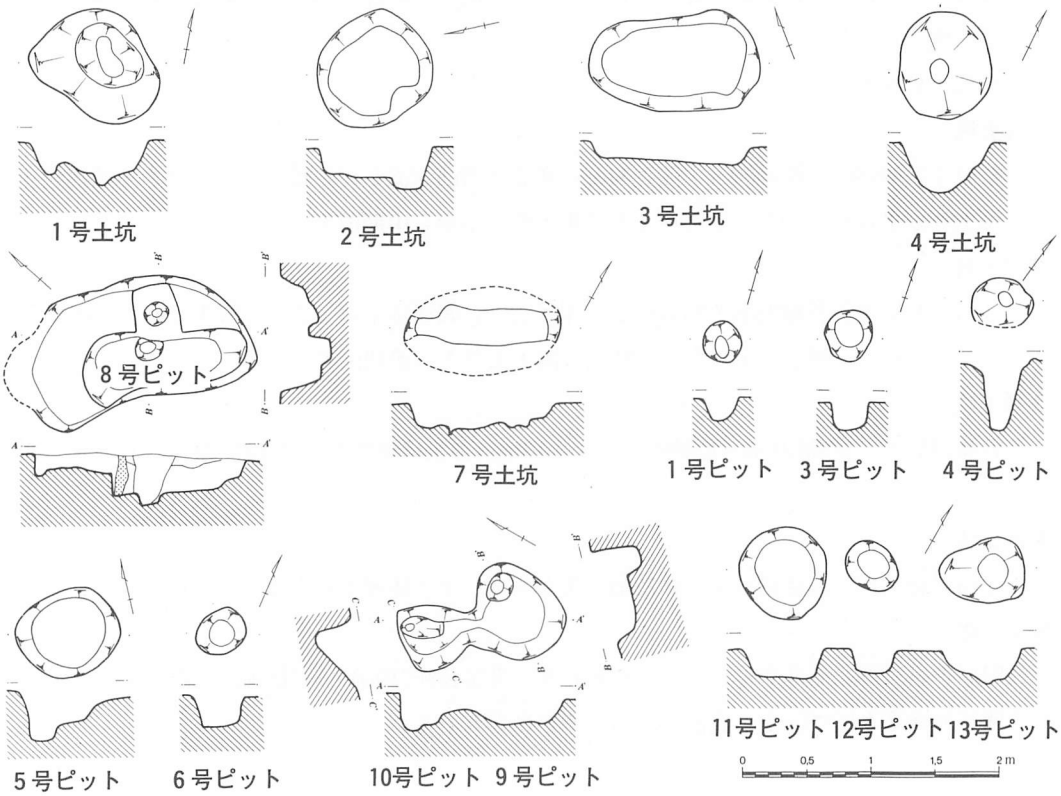
楕円形を呈し、長径180cm以上・短径90cm・深さ14cm。８号ピットに切られる。土坑東側に小穴がある。径20cm・土坑底面からの深さ８cm。上部に暗褐色土・下部に褐色土が堆積する。

７号土坑

南北両端を削平される。長径122cm・深さ18cm。底面は凹凸が激しい。

ピット

14基確認した。１号・３号ピットは径30cm前後・深さ20～30cmで締りある褐色土を覆土とする。２号ピットは径80cm・深さ37cmを測るが上部は畝により削平される。４号ピットは径48cm・深さ50cm。覆土は締りある暗褐色土でローム粒・炭化粒を含有。時期は縄文早期後半である。５号・６号ピットも覆土は４号ピットと同じである。５号ピットは一部畝で削平される。７号ピットは５号土坑を切って掘られる。平面形態は円形を呈し、径60cm・深さ44cm。覆土は中心にやや軟質の暗褐色土、壁際に締りある褐色土が堆積する。８号ピットは６号土坑の上に掘られ、径32cm・深さ40cm、硬く締る褐色土を覆土とする。９号・10号ピットは径20cm・深さ30cm前後の小穴で、上部に締りがあり焼土を少量含む暗褐色土が堆積する。11～13号ピットは40～70cm・深さ20cm前後で、いずれも硬く締り、焼土粒を含む褐色土が堆積する。14号ピットは上部を削平されるが、10号炉穴を切って掘られ、締りある褐色土を覆土とする。



第５図　浄禅寺跡遺跡第４地点　土坑ピット（$\frac{1}{60}$）

5．炉穴出土土器（第6図1～11）

1号炉穴・4号炉穴を除いて他の炉穴から遺物は出土しなかった。1～4は貝殻条痕文土器片で、1・3は表裏条痕で2・4は表面のみ条痕文が施こされる。5～9は無文であるが1～9ともに胎土に多量の植物繊維を含み、4～9は焼成不良でもろい。1号炉穴は早期末といえよう。4号炉穴出土の10は斜位の条痕を表面にもち、11は無文で胎土は1号炉穴出土のものと同様の特徴をもっている。4号炉穴も早期末としてよい。共に胴細片のため時期細分はむり。

6．土坑・ピット出土土器（12～19）

土坑7・ピット10のうち、遺物が出土したのは1・2号土坑、4・10号ピットのみである。12は1号土坑出土の無文浅鉢土器の口縁部片で胎土に金雲母を含み整形入念で阿玉台式期。13・14は2号土坑出土で、13は磨滅著しいが表裏条痕文の胴片で、14は斜位の細条線を地文とし縦位の貼付に刺突を加えた胴片で焼成堅く赤褐色を呈し、諸磯C式併行期のものである。15～17は4号ピット出土で、5・6は表裏条痕文が、7には表面に条痕文があり、早期末。18～19は10号ピット出土で繊維の圧痕が見られ、胎土に多量の繊維を含み焼成不良である。

7．遺構外の土器（第6図20～61）

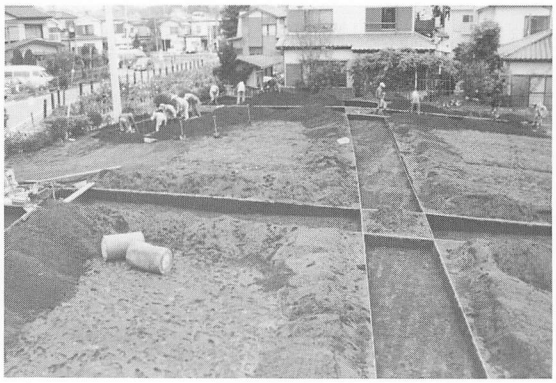
調査区遺構外からは、早期前半～後期初頭の土器細片60余が出土したが、42を図化した。20は撚糸文土器の胴片で胎土に輝石末を含み焼成良好、厚さ6㎜である。21は口唇直下に棒状工具による沈線をめぐらせた口縁片で胎土に微量の繊維を含む。22は口唇上に刻目と体部に斜位の棒状工具による沈線をもつ。23は太い沈線と刺突をもち、25は微隆帯文をもち繊維を含む。24は口縁部片で、表面は貝殻条痕文を斜位にほどこした後に、口唇直下とその下方に押圧縄文を複列に三角形に施こし、口唇上面にも押圧文がある。裏面には横位に条痕文がほどこされてる。胎土に若干の繊維を含み焼成良好で暗褐色を呈する。東海地方の天神山式に類似する。26～33は条痕文をもつ胴片で、28は表面縦・裏面横位の条痕文をもち、29・30は表面に繊維押圧痕が裏面に条痕文がある。35の無文底部も26―36と同様に胎土に植物繊維を多量に含む類。40は半截竹管による連続瓜形文を口縁直下に施す諸磯a式のもの。41は波状口縁深鉢の波頭部片で、半截竹管を用いて、連続瓜形文を波頭ぞいに2列めぐらし、波頭直下には縦位に同様文様をつける。体部には刻目付結節浮線文が渦状回転文で全面にほどこされる。胎土には多量の金雲母を含み、整形入念で焼成良好暗褐色を呈する。十三菩提式である。

43～45・48～56は無文であるが胎土に金雲母を含む類で中期前半、44は浅鉢の口縁部である。57は口縁直下に沈線をめぐらせ、その直下を肥厚させた口縁部片。58～60は、磨消ののち沈線による縦長区画をつくり、その内部に刺突文を加える。後期初頭。61は口縁に近い胴片で、上半は無文、横位沈線下には地文の細縄文で、後期加曽利B1に近いもの。

1・4号炉穴、4号ピットは早期末の土器のみを含むものと2号土坑のように早期末と前期末土器を混在する遺構もある。遺構外出土土器のうち注目すべきものは25の天神山式類似片と41の十三菩提期口縁部片で、後者は胎土に金雲母末を多量に含む点で勝坂式分布圏と阿玉台式分布圏の共有圏としての特色と相応ずるものかもしれない。

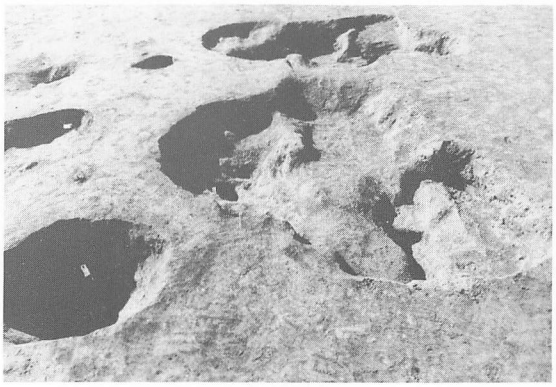
第６図　浄禅寺跡遺跡第４地点　出土土器（$\frac{1}{3}$）

調査前風景



調査風景

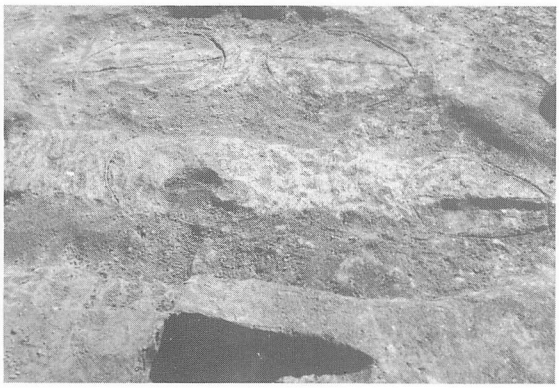
東側調査区全景



１号・８号炉穴

６号炉穴・ピット・土坑

４号炉穴



２・３・７号炉穴

５号炉穴